

〔撮壠集中〕英ハナフサ

萼ハナフサ

〔書言字考節用集六生植〕英ハナフサ

字彙、華也、草同

〔倭訓栞中編二十〕はなぶさ

花房の義、常に英をよみ、倭名抄日本紀に萼をよめり、

〔剪花翁傳前編凡例〕花形分解之辨略○中

二十

はなぶさ

花房の義、常に英をよみ、倭名抄日本紀に萼をよめり、

〔剪花翁傳前編一〕花形分解之辨略○中

二十

はなぶさ

花房の義、常に英をよみ、倭名抄日本紀に萼をよめり、

三に曰、萼は花總とよぶ、花形の總ての括なれば也。又花萼とよぶ、葩の萼にして、齒に齶あるがごとし、又蒂ハタとよぶ、葩と莖とを隔つの義、劍に鍔あるがごとし、蓋ツバは刃と柄との間をツバメルの義、されば萼は花總のツバメにて、ツボミのもと也。故にツバメ、ツボムなど、音義通へり、萼、鈿、鍔三字の形音義ともにひとしきをおもふべし。

〔撮壠集中〕蒂ハタ 蕃ハタ

含ハタ

〔饅頭屋本節用集門類〕苔ハタ

〔書言字考節用集六生植〕苔ハタ

心書纂要、花含

苔蓄俗用此

〔倭訓栞前編十六〕つばみ

苔をよめり、つばむ義也、苔蓄も同じ。

〔剪花翁傳前編二〕花形分解之辨

夫冬より春の花は、苔なるもの久くして、蓄となり、一旬許して、蓓となり、三五七日許して開花す

るなり、夏より秋の花は、今朝の苔午の刻までに、蓄となり、夕方より、蓓に成、翌早朝開花する也。扱

苔は、龜皮にて包めるをいふ、蓄は、葩の貌、既に苔の中に萌し満て綻るものをいふ、蓓は、葩既に半

外に顯て、開花せんとするものをいへり、乃上層に摸するごとし、略○圖

右各樹艸によて、萼の形ち異同あり、

再云、苔蓄蓓をいづれもつばみとよべり、初を苔といひ、中を蓄といひ、後を蓓といふ、苔は含也、

是牙音にて堅く、奥に在ていまだ發せず、蓄は雷也、是舌音にて、内に鳴響て既に萌し發す、蓓は